

巨乳

令嬢

MC

学園

洗脳ハイレム強化計画

布地はるか
編みかイハカ

巨乳令嬢MC学園

洗脳カレム強化計画



著：布施はるか

画：スカイハウス

原作：ルネ

PB オトナ文庫



フロローク 巨乳令嬢MWモーニングウッド学園

フロローク 巨乳令嬢MWモーニングウッド学園

第一階
巨乳令嬢MS(マクニイセントセックス学園)
第二階
巨乳令嬢MA(マリシックスアクション学園)
第三階
巨乳令嬢MF(マッドフロリ学園)
第四階
巨乳令嬢MD(モラルディファイティヴ学園)
エンローク
巨乳令嬢MC(モアコンプリメント学園)

249 203 144 88 19 5

池ノ上拓海 Takumi Ikenoue
元女子校である王立学園に在籍する唯一の男子で、当初はアリスたちによって命懸けされていた。だが弘人理事長の力で脱獄を成功し、その結果で女子全員が自分の精液を求めるように習性を改変する。

神泉 理央 Ryo Kamizumi
B:88cm(F)
W:58cm
H:87cm
幼少期からモデルとして活躍しており、学園内に限り付き合っているほどの人気者。軽い見た目に反し計算高いところもある。唯一の男子学生である拓海を、ことあるごとに虐めている。

吉祥寺 アリス Aria Kishouji
B:93cm(G)
W:59cm
H:85cm
学園を運営する吉祥寺家の嫡で才色兼備のカリスマ的存在だが、最の子であるため父親からは見下されている。MC効果のあるオルゴールを使い、水面下で学園支配体制を築きつつある。

植水 こはる Koharu Fukunaga
B:104cm(I)
W:62cm
H:92cm
主張の強いバストとは裏腹に、引っ込み思案で優しい心をもつ少女。学園内で唯一拓海に対して同情的だが、断固的にかばうことはできず、誰も見えていないところで声をかけてくる。

久我 友里子 Yuriho Kuga
B:95cm(G)
W:60cm
H:91cm
吉祥寺家に代々仕える家の嫡で、アリスとは幼なじみの親友であり、学園支配を支える実力者でもある。文武両道かつ生真面目な性格から、学園では風紀委員を務めている。

「あ……も、もう……こんな……」
ドロリとした顔にまみれる僕の頭を問答に、吉祥寺アリスが顔を赤らめた。
アリスは国内屈指の名家・吉祥寺家の一員で、イギリス系のクォーター。クラスのり！
「うわっ？ メッチャ、ドロリの顔いやっちゃん……」
目を見くくして呟いたのは、神泉理央。現役カリスモデルのギャル系美少女は、ツイン
テールの髪を僕の首の根もとに絡みつけて、うっとりしている。
「このツインとさ……んっ、あ……まだ、濡れてきています……」
いつもクールで堅物な風紀委員の久我友里子も言った。彼女はアリスの親友で、今もア
リスの隣でスリッパを履きながら、遅いんだ……
「やっばり池ノ上くん……遅いんだ……」
僕の肉芽に顔を寄せて、「ほう……」って息をついたのは、植水こはる。僕のことを何か
と気にかけてくれる、心優しい巨乳少女だ。
クラスの中でも存在感を放っている面々が、寄つてたかつて僕の股間に群がり、射精済

みのペニスを表情を薄かせて見つめている。男性高への忌避などまったくない。粘りつく精液をただただ物欲しげに見つめる様は、まさしく暗示のめたらす結果に違いなかった。

そう、暗示……

僕、池ノ上拓海は、私立・王京学園で唯一の男子生徒だ。

王京学園は由緒正しい名家のお嬢様が通う全寮制の女子園だったけど、理事長の交代によって方針が変わり、男子の入学を許可することになったのだが……、入学できた男子はなぜか僕ひとりだった。

僕が優秀だったから……じやない。実際、僕は「特別推薦生」という、よくわからない制度で入学できたようなものだ。

幼い頃に親が離婚して仕事一辺倒の父さんとふたりきりで暮らしていた僕は、息苦しい家から逃げたように一心で全寮制の王京学園へ入学した。学生時代は常にトップを競っていた父さんに比べ、僕はあまりにも平凡な、一緒に暮らすだけで無言のブレッシャーに押し潰されてしまっただけだった。

だから僕は、担任の先生から勧められた王京学園の特別推薦生に飛びついたんだ。

それが、僕の運命を変えた。

大勢の女子の中にただひとり男子がいることで、僕は完全に異分子扱ひされた。それは日増しにエスカレートして、ついにはイジメになった。無視された、悪口を言われるのなんて可愛いもの。四日前には、昼休みの教室で神泉さんにズボンの上から車輪で股間を

踏みつけにされて、強引に射精させられる……なんてことまでされた。

先生達も見えぬふりを決め込むなか、僕の味方はクラスメイトの福水さんだけだった。彼女だけは、僕のことを何かと気にかけてくれて、いつも助ましてくれていた。

福水さんは優しいから……、もしかしたら僕に好意を持っているかもしれないから……、そう思っていた。

でも、それは全部、僕の勘違いだった。

僕は知ってしまった。それは偶然からのことだったけれど、学園が……、それこそ理事会や教職員に至るまで、表には何も名前もいっさい出さない謎の理事長によって支配されていたことを……。

理事長は、前朝の予備代わりとなるオルゴールの音色で学園の人達をトランス状態にして、自分の思いどおりになるよう暗示をかけ続けていたのだ！

オルゴールは英国の魔術師の家系に伝わる魔術具で、その持ち主である理事長というのは、同じクラスの吉祥寺さんだった……

彼女は、亡くなった母親の形見である魔法のオルゴールを使って、母を捨て、自分を邪魔者扱いする吉祥寺本家に復讐するつもりだったらしい。

学園のお嬢様達を意のままに操り、男社会へ反逆の旗幟をあげる。そのための生け贄が僕だった。学園じゅうルキーの最底辺に置かれた僕は、学園の女子達の「ストレスの捌け口」に仕立てあげたんだ。

そんなことなんて知らなかった僕は、逃げ場のない状況にひたすら耐える日々を送ってきた。自分はそういう人間なのだ。それが自分の役目だから……と、思うようにすらなっていた。

ところが、それさえも吉祥寺さんのかけた暗示によるものだった。僕の味方だと思っていた福水さんも、吉祥寺さんの暗示に従っていただけだった。

先週の本曜、クラスメイトの前で屈辱的な射精をさせられ、放課後にひとりぼっちで怒めてくれた福水さんに告白して見事に玉砕した僕は、鬱屈した感情を紛らわすため、翌日に校則を破ってボーイタル章者プレイヤールを制服のポケットに忍ばせたことが転機となった。

バレないよう片耳だけにこっそりつけたイヤホンで朝から好きな曲を聴いていた僕は、お蔭で予鈴のオルゴールの呪縛から抜け出すことができた。そうして、吉祥寺さんと、彼女の親友・久我さんが仕組んだカラクリに気づいた。

学園全体がマインドコントロールされて、いるという事実……、いや、日頃から僕のことを弄んできた神泉さんをはじめとする学園の女子達に復讐を誓った。僕の味方だと思わせておいて、その裏、ただの操り人形だった福水さんも例外じゃない。

一昨日の放課後、理事長室に忍び込んで魔法のオルゴールを奪った僕は、その日のうちに、吉祥寺さん、神泉さん、久我さん、福水さんの処女も奪ってやった。僕のかけた淫らで邪な暗示によって、彼女達はこの僕に自ら進んで処女を捧げたんだ……

だけど、僕の復讐はそれだけでは終わらない。むしろ始まったばかりだ。学園二の美少女・吉祥寺さんで童貞を卒業したところか、カリスマアイドルや文武両道のお堅い風紀委員、学園一の爆乳少女の処女を一日でいたたいてもなお、僕の憤りと欲望は収まりはしなかった。

そして日曜日の今日、寮の自分の部屋で目を覚ました僕は、激しく濃厚な童貞卒業から一日の間を置いていきり勃ちてしまっていた欲望を鎮めるため、昼校するなり空き教室に四人を集めてイチモツをしやぶらせている。

「それにしても……、せつかくの精液をこんなムグにするなんて……」

「さっさとっかりズボンの中で暴発させてしまった僕に、吉祥寺さん……、いや、アリスが言った、すかさず友里子も続く」

「もうです、あなたは射精するということへの自覚がたりません」

「理央が呆れたようにぼやけば、こはるが控えめに口を捻でくる」

「で、でも……、ちよっとは染み込んだけど、まだ残ってる部分も多いから……」

「僕への非難と、それに対してのフロローという位置関係は依然として同じなのが少しおかしかった。どんなに暗示をかけても、人格の根っこ部分はそう簡単にには変わらないよ」

「うだ。けれど、確かに認識は大きく変化している」

「四人には昨日「精液は尊く、精液を体内に採取すると至上の幸福を得られ、それこそが

女性の本懐だ」といったカンジで「精液至上主義」の暗示を刷り込んでおいた。

そのことを実感しながら、僕はもう少し現状を確認することにしよう。

「あの……、ごめんなさい。でも、ちょっと出しただけで、どうしてそんなに大騒ぎするの？」

「何を言ってるの……？ 精液は、女の社会的な価値を証明するうえで、もつとも貴重なものに決まっているでしょう！」

僕をバカにした様子で、アリスが歪められた顔で言葉を放つ。

「ナマの排泄物で精液なら、どんな宝よりも高く取引されるものです。あなたは、その貴重な精液を提出するためにここにいるはずですよ！」

「そうそう！ だからこそ、それが一番ふさわしいアタシの許可なく射精とか、赦されないうでしよう！」

友里子と理央も追従するが、理央の言葉はアリスの頬に当たったらしい。

「神楽さん、これはあなただけのものではありませんね。加減を間違えて暴露させたあなたには、むしろ遠慮するべきでしょう？」

「冗談！ いくらアリスでも、それは聞けないでしょ。チンポ抜いたのはアタシの仕事だし！」

やはり、「精液至上主義」というマインドコントロールは、恐ろしいほどに彼女達の意識に刷り込まれていた。



僕をバカにしまっていたアリスと理央が、まさか僕の精液を求めて小競り合いまでするなんて……

「わかったよ……。ちゃんと精液は出して、いくら、ケンカしないで舌で舐めとって、ついでに残ってるぶんも採取してくれる？」

「フン！ 言われるまでもないわ。すぐに処置しなくてはね……。んレロ……。んレロ……。」

「あーっ!! なにフライングしてんの! アタシも……。んっ。レロ……。レロ……。」

「掘てないでください。ちゃんと順番どおりに……。あ、あ、あ、もう! レロ……。んっ。一度始まってしまえば、あとはもう腰を切ったように一斉に舌が振り出す。まず、たつぷりの精液が残った亀頭を、アリスと理央が我先に舐めとり始める。その隙間を縫うようにして、友里子も巧みに、垂れた精液を吸い上げていく。

「わ、わたしは……、ここに残ってるほう…….……するわ。あ……んむ。チュプウ……」

遠慮がちなこはるは競り合いに参加こそしなかったが、二人が群がる亀頭から下の根もとに残っていたぶんを丁寧に舐めた。

「チュプ……。んっ。ふ……。んむ……。やっぱりこの味……。んチュプ、凄く辛へな気持ちになれるのね。んレリユ……」

その薄けた表情は、もちろん演技でできるものじゃない。強制的にさせられているのではなく、彼女達は精液採取を当然のこととして積極的「フェラチオ」に臨んでいるのだ。

「んっ。はあ……。チュプ……。もう舐めきってしまったわ……。んあ……。新

しいのは……。んリユ……。まらなの……?」

僕の学園生活における諸悪の根源だったアリスがねだる。

「吉祥寺さん、ずっと同じ場所を……。んチュ……。舐めていきますよ」とアリスの片棒を担ぐ友里子が、さすが後等生の風紀委員らしく親友をたしなめた。もつとも、すかさず反駁したのは僕の天然だった理央。

「んっ。そんなこと言って、場所を変えた瞬間、そこを乗っ取る気なんでしょ? ……たくっ! 油断も隙もねーよな」

「くだらないことを……わたしはただ、より効率的な射精への導き方を言っただけです」

「理央の予言がアリスに向く、もちろん、アリスが黙っているはずもない。もういちひ詰めてつて。どうして私があなたに遠慮しなくてはならないの? レロ……。んっ。チュプ……。」

こはる、ずっと私の場所ですわ。はんむ……」

僕の肉棒を夢中で舐めながら、時折お互いを牽制しているのがなんとも滑稽だった。思わず苦笑しつつ、僕は競い合う二人に言ってくる。

「先づも悪くないけど、今はくびれた皮の締めめのところのほうが出しやすいかも」

「そんなこと、あなたなんかに言われるまでもないわ。ん……。あむっ」

「この、特に匂いが強い部分……ですわ。んっ。ピチャ、んう……。少し汚れが……」

つい昨日ロストヴァージンしたばかりのくせに知ったかぶりをするアリサに対して、友里子のほうがまだ素直だ。ただ、初めて目にする恥垢の跡えたおにに腰が返っている。「ハハ……ごめんね。でも、チンカスも一掃に放りまわって、射精も近いからね」そんな出せに理央がまっ先に責めつけた。「んんっ、じゃあ、もう一回っ、んんっ……」レルレ……、レロレ……。「すぐさうして好きなところを……、まったく……、どれだけ育ちが悪いのかしらっ」夢中でしゃぶっているアリサに言われたくないし。はんむ……、ホントだ……。ピクピクしてんの……」

まったく。暗示をかけてあるとはいえず、面白いように暗示に従ってくる。実のところ、せせと根もとを揺るがしているのは含めた四人のなかで、フェラチオ未経験なのはアリサだけだ。ほかの三人は「昨日の夜女喪失行為の時にしゃぶらせている。まあ、それでもう既に経験がないのはみんな一掃、なんどくくの常習犯で放りまわっているから、コフもよくわかってないんだ」

「フフ……、それでも必死に拒がって……、あつ、同時に舌が重なって……、くっ」何をやニヤ見ているの？ 気持ち悪いわね……。レロ……。んんっ。チュプ……。悪態をつきながらも、アリサは自分のしていることにまったく違和感を持っていない。この、僕の掌の上で転がっている感覚は確かに愉快だ。

「んっ、ふ……、チュプ……。んむっ。レロ……。あ……。今、反応がありました」

友里子が言う、こはるも丸くした目を僕に向けてくる。

「根もこのほうも、震えてきてるよ……」池ノ上くん……、気持ちいいの？

「うん、気持ちいいよ……。んっ。このままだと、そろそろ出ちゃうかも……」

実際、限界が近い。腰の痙攣がゾワゾワしてきた。

「あむっ。チュプ……。今度は出る時、ちゃんと言えよ？ しつかりアタシが飲んだげるからさ」

「何を勝手なことを言っているの？ これは私のものよ。あなたに誰何なんかいわ」

「百祥寺さん、わたしも地味はよくない……、んチュプ、思いますので……」

池ノ上くん……。んっ。チュプ……。僕の反応を見て、それぞれがソワソワと落ち着きなくし始める。みんなが精液を求めて……、これまでの学園内でのビエラルキを微妙に見え隠れさせながら、精液のための絶好の位置をキープしようとする。

「大丈夫だよ。ちゃんと公平に、みんなの順にぶっかけてあげるから。んっ、く……」

「ぶ、ぶっかけ……」

「つまり……《顔面射精》という……ことですか？」

アリサはキョトンとしていたが、友里子は知識だけならあるらしい。

「うん、それなら、みんなが平等に精液を浴びることができるでしょ？」

「はっ。池ノ上にしちゃ、わかつてんじやん？ なんでもいーから、ビュルッと出しちゃ

え！」

「ん……。一生懸命するから……。いっぱい出してね……。レロ……」

派手さと地味さが好対照な理央とはが、それぞれの個性そのままにねだつてくる。もう彼女達四人の頭の中は精液のことではないんだ。射精が近づくとつれいっそう舌先に熱を込めて、今か今かと訪れるその瞬間を心待ちにしているように見える。

「レロ……。あんむ。ピチャ……。んっ。あ……。んむ……。まだ、なの……」

「震えが大きくなつていきますから、もう少しはです……。んチュプ……。レロ……」

「チュプ……。さっしはすぐ出したクセに……。んっ、今度は中途半端に焦らしやがつて、このっ！ チュバ……」

「んりゅ……。レル……。んチュプ。いつでも……。いっばい……。んチュ、出して……ね……」

四か所から「齊にもたらされるめめつた舌先の快感に、我慢なんかできるはずもない。んく……。フフ……。ん……。出るよっ。そろっ、滑り……。」

ドクンという鈍い衝撃が鼓膜に伝わり、直後、亀頭の先端から白い精液が連なる。

「さやあつ……。んん……。あぶっ。か、顔に……。ん……。何さ？」

「んん……。濃密なのが……。んん……。ねっとして糸を引いて……。んチュプ……。ああ……。この匂い……」

「ん……。マジでクラクラくる……。ヤバ……。んっ、チュプ……。レロ……。こんな

ん、とまんないでしょ……。レロ……」

「ピチャ……。んチュプ。はあ……。美味……。んんっ。池ノ上くんの精液……。んっ、凄く滑いよ……」

四人まとめての顔面射精に彼女達は一瞬だけ目を見くしたが、すぐに粘りつく精液の感触に表情を落させていく。

「んっ。レロ……。まったく……。こんな鼻先に出されたら……。顔めにくいじゃないの……。んんっ。チュプ……」

それでもアリサはアリサのまま。相変わらずの常習犯発言に、友里子がそつと囁く。

「吉祥寺さん、でしたら、わたしが試めたりましようか？」

「……。いっ、いいのよ……。これは、私が自分でやるから……。レロ……」

「エリートのお嬢様が白なした……。そう僕がフツッコミを入れるまでもなく、理央が小バカにしたようになつて、必死じゃん！ 友里子も油断も隙もないし。チュプン」

「べつに、わたしに飽意はありません。ただ、より効率的な摂取を提案しただけです。レロ……」

いかにも友里子らしい言い様だ。でも、彼女には《精液中毒》の暗示をかけている。本音じゃどう思っているのやら……。

そんな三人をよそに、ひとりこはるだけがひたすらうつつとっていた。

「はあ、チュブ……美味ひいよ……。んふっ、精液……。幸せ……」
 なんにしても、我先にと精液を求め、その味に恍惚状態になっている姿を見、スッと
 溜飲が下がるのを感じる。
 「ん……。もう少し出せるよ……。んっ。く……。」
 続けてもう一発射精してやると、降りかかる白濁液を四人は嬉々として受けとめた。
 「んあっ!! あ……。まだ残してたの……。んあ……。レロ……。ベロ……。」
 「あふっ。チンポから垂れてきてるじゃん。もったいない……。ん……。レロ……。」
 「チュル……。ん……。ん……。」
 「んっ……。ん……。ん……。」
 「んっ……。ん……。ん……。」
 新たに溜れた精液も、あんなに舌が群がり、出した傍から喉いもられていく。
 「あ……。あ……。あ……。」
 「アタシも……。あんなふうに飲めたら……。ん……。」
 「ふと……。そんな声で聞こえる。理央の取り巻きのギャル系女子だ。彼女達にも一昨日、理
 央のロストヴァージンの時に暗示をかけてギャラリイになつてもらっていた。
 今朝もまたま理央と一緒にだつたらギャラリイをさせたんだけど、物欲しげに見つめ
 る顔が半端なく欲情してる。
 これが、マインドコントロールの力……。こうもうまくいったことに、僕は自然と笑み
 が込み上げてくるのを堪えられなかった。

第一章 巨乳令嬢MSのミニマニセツトセリヤの学園

朝勃ちを鎮める精液が落ち着くと、名残惜しげな四人から体を離すのも一苦労だつたけ
 ど、なんとか自由を確保した。
 「ふう……。さて。それじゃ、もう少ししっかりルールを設定しておこうか」
 それから僕はイヤホンをつけて、昨日までアリサのものだつた魔法のオルゴールの音を
 聞いて音色を聴かせる。
 今日はいくつか、学園の仕組みを塗り替える。アリサがしてきたのと同じ方法で、学園
 の女子達を刷り込み状態にさせるのだ。
 暗示をかけてその場を解散させた僕は、アリサだけを連れて放送室へ向かった。
 魔法のオルゴール。それは、音色を聴いた者をたちどころにマインドコントロールのた
 めのトランス状態にさせるという、見境のない恐ろしい道具だ。仕組みはよくわからない
 が、アリサと友里子の会話を盗み聞きした限りでは、アリサの母の美家であるエルバート
 家に代々伝わり、魔術の秘宝を集めて作られた……。このこと。
 効果のほどは、さっきのフェラチオで明らかだろう。
 アリサとともに放送室に歸った僕は、イヤホンが繋がる音楽プレイヤーの音量を最大に

してから、予鈴代わりのオルゴールを全校放送で流した。
 学園全体がトランス状態に陥つたであろうことを、隣でぼんやりと街を見つめるアリサ
 の姿で確認し、僕はオルゴールをためて暗示の放送を開始する。
 「キミ達。王立学園の生徒は、数多くの女子の中から選ばれた優秀な人間です。その目的
 は……。池ノ上拓海からいかに精液を搾りとっていくか……。そのことを常日頃から
 考えて積極的に行動することです。それは、この先の自分の価値を高める行為で、キミ達
 の将来にプラスになることなのです。ただし、僕もいつでもどこでも精液で遊ぶわけじゃ
 ない。だから僕がしたい時に、いつ言われてもいように聞えてください。口でも、オッ
 バイでも、オマコでも、どこでも……。得意な場所でも構いません。男が興奮するための
 技を磨いて、僕が喜ぶような射精……。肉体系仕様がでるなら、必ずそれが助けるはず
 です。精液の味が好きで嫌らなくなります。飲んだぶんだけ幸せな気持ちになります。そ
 れをもっと味わいたいと思うようになります」
 どこまでも自分に都合のいい欲望まみれのセリフだが、横に立つアリサはしつかりと頷
 いていた。アリサからしてこの様子なんだから、ほかの生徒や教職員も同じだろう。
 今日から、アリサが友里子と協力して行ってきた《女尊男卑》の一連のマインドコント
 ロールはなかつたことになって、代わりに僕が行う新たなマインドコントロールに引き継
 がれる。それにより、先週までの僕への迫害の数々は、すべて《僕の精液を採取する》と
 いう、ある意味正反対の日常になつていくはずだ。

クラスで、学園で、唯一の男である僕は、その性別がゆえにアリサの仕組んだ生け簾と
 して理不尽に扱われてきた。だがこれからは、魔法のオルゴールの力でヒェラルキーの
 頂点に立つのだ！ 学園唯一の男として、その素晴らしい性別によって!!

「おはようございます」

挨拶をしながら教室に入ると、クラスメイトの女子達がザワリと少しざわめいた。
 それは、今までと違って変わるこのない好意と興物を見るような目。返事がないこと
 も含めて、決して好意的な雰囲気じゃないことはわかりきっている。
 僕の精液を搾り取る……。その目的はもうろん補えつづけたのだらうけど、それと好
 意とはまた別の話になるのだ。
 まあ、いいや……。その気になれば、マインドコントロールで僕にサボヤさせること
 もできるだろう。ただけ今は、そんな（っここ道）をしなくてもいいから、
 今、気にするべきなのは、もつと深いところでの（これ）からだ。

「おはようございます」
 「おはようございます」
 「おはよう、何事もなかったかのように教室へと入ってきた」
 「あ……。アリサさん、おはようございます」
 「おはよう。今日もいいお天気ね」

当り障りない挨拶をしているアリサに、不審な様子はまったくない。早々に教科書を

「あ……いけない、もうこんな時間なのね……」

時計を見たアリサが「起立」と号令し、率先してプレザリーのボタンに手をかけた。

「皆さん、それでは、早速朝の健康診断を始めますわ。ただちに胸をだけさせなさい」

クラス的女子達もアリサに従い、プレザリーとベスト、ブラウスのボタンを速いなく外していく。

「池ノ上くん、何をグズグズしているの？ さっさと前に出なさい」

「……っ、はいはい……」

思いどおりの展開に、僕はペコペコ頭を下げながら、ひとりで教壇に登る。

「これ、いい……いよいよ、素敵な鑑賞会の始まりだ。」

「おおお……」

僕は感嘆の声を漏らした。盛大にはだけた胸もくにブラジャーもずらし、たわなオッパイを完全に露出させた女子達がどんと背すじを伸ばして並んでいる。その壮観な眺めに思わず「っ」と見惚れてしまう。世界のどこに、こんな贅沢な空間があるだろうか。

まさに「巨乳学園」だ。そう思わずにはいられないのか。

「ちよつと、池ノ上くん、何をボンヤリしているの？」

「あ……あ……ゴメン、つい……」

「まったく……いつもグズグズしてますわね。今は健診中でしょう？ 集中なさいっ」

「は、はいはい……」

「じゃあ、吉祥寺さんのから……」

ただたどしい言葉にも彼女達は何も言わず、静かに僕の指示を待っていた。

「ええと……このクラスでは、朝のホームルーム前に毎朝健康診断することになってます。その診断は、オッパイをさらけだして、膨らみ具合や乳首の感度、全体の柔らかさなどを触診するものです。診断を受けるキミ達は、診断者である僕の言うとおりにオッパイを見せて、自分達の感度のよさをアピールしてください。女子として、健康的なオッパイであることはもちろん、より男を誘うようないやらしいオッパイであることが、何よりも大切です。今日はできのいい限りのみんなの状態を詳しく確かめようと思いますので、僕が手を鳴らしたらアリサの指示に従ってください」

「はい……アリサの指示に……従います……」

友里子をはじめとするアリサのシンパ達は、迷うことなくそう口走り、ほかの生徒達も小さく頷いてみせた。

「アリサ、キミはクラスの代表として、オッパイ診断をしつかりと進行させるように、いいね？」

「ええ……オッパイ診断を……進行……させるわ……」

この時ばかりは、本当に素直に、アリサも迷いなく僕の言葉に頷いてみせた。

「よし……じゃあ、戻すよ……」

三つ数えてからバチンと両手を打ち鳴らすと、ハッとみんなの流れている時間が元に戻り、現実立ち返る。

アリサが行ってきたマインドコントロールによるものだったが、それでもひとり、僕を助まそうとし続けたことは、結果的には、今も遠く形では助まされ、磨かれていることになっているのかもしれない。

「フフ……」

自然に喉が二ヤけるのを堪えつつ、四人の胸もとに視線を注ぐ。彼女達の豊満な感度はもちろん素晴らしいけれど、大きくてほみ甲斐のあった乳房もまた魅力があった。そういうのは、四人以外にも、このクラスをはじめとして学園のみんなは誰もが……というか、オッパイが魅力的な人が多い。せつかくだし、まずはそれをじっくり鑑賞するところから始めようか。

僕はイヤホン装着して大好きな曲を再生すると、オルゴールの音を聞いた。

オルゴールからメロディが流れた途端、アリサと友里子の胸からスッと意志の光が消えていく。続けて理央、さらにはこはる。そしてクラスの女子達が一言に同じ状態になっ

「凄いな……」

「いいえ……」

「僕の命令を待って、いつさいの行動をとめてしまっているクラス中の女子達、これから命じるのは、そんな彼女達の、よりプライベイトな一面に関わるのだ。そう思うと、胸が高鳴ってくる。」

「あー、あー、えーと……、みんな、僕の言うことをよく聞いてください」

開いて予習を始めていた相棒の友里子ともども、今の状態をおかしいとは思っていない。これで、新しい日常にシフトできたってカンジかな……

アリサ達の通ってきたこれまでの日常が、いつの間にか僕の用意する日常になっても違和感を持たなければ、成功だ。

「だけど、いつ、どんな形で記憶が戻ったりするかわからない。だから僕にできることは、毎朝しつかりとマインドコントロールを施して、これが彼女達の日常であることを徹底させる……っつこと。どんなに異常なシチュエーションだとしても、それが毎日の出来事であれば、自然に日常へと変わる。毎日欠かさず刷り込みをして僕の世界に取り込んでやる。その作業が、今は何よりも大切なことだ。」

あらためて、何も知らずにいるアリサ、友里子、理央、こはるを眺めていると、それぞれとの初体験のことを思い出してムラムラしてくる。

自身はオナニーの「現」と信じて疑わないまま、僕に種付けを求めてくれたアリサ。僕のことをクズだなんだと罵りながら、最後は中出しアクメに落ちていた。たつぷりと精液を搾りとりてやると思えた理央。しかし、実は処女で、泣き言を言いながら最後だけピースサインで余裕のあるふりをしていたっけ。

僕の金みにいち早く気づき、それを阻止しようとした友里子。でも結局、僕が施したマインドコントロールで見事な「精液狂い」に変貌を遂げ、普段からは考えられない態勢を披露してくれた。